

また、個人カルテに書かれた、児童の感想の中には「とても楽しい6時間だった。マット運動OK。」とか「いっしょうけんめいになって教えたり練習したりできてよかった。またこんなじゅ業がしたい。」というものもあった。

ただ、3・4時間目の《「やった!」「スカッとした」などの気持ちを味わえましたか》の項目で、12%の児童の意欲が低下していた。これは、技の得意な児童が、すべてのコースを短時間で簡単に達成してしまったためと推測される。

個人カルテに、自分の気持ちを素直に表現することは、自分の「よさ」を再認識し、次時への学習意欲の高揚を図る大きな手だてとなった。

このように、学習意欲が高まったのは、個人カルテに記入の際、「今度はがんばろう」とか「もっと教えよう」などの意識が一層明確に目標化されたためと考えられる。

(3) 「よさ」を意識化させる指導について

① 「よさ」を意識化させる場の設定

1・2時間目の課題把握と解決の段階では、既習の技やこれから学習する技の練習で、お互いの学習への取り組み方について「よさ」を相互評価させた。3・4時間目の学習内容の理解と定着の段階では、児童に自由にコースを選択させ学習を進め、児童一人一人ができるだけ多くのコースを達成するため、技の細かいところまで教え合うことでお互いに「よさ」を意識化していった。また5・6時間目の発展学習の段階では、技が上手だけでなく、組み合わせ・技のつなぎを工夫している人や、技が上手になった人などの具体的な視点を示し、各班で発表する代表を選ばせた。これにより児童は、誰が工夫しているのか、誰が上手になったかといった観点で「よさ」を意識化するようになり、お互いが協力して学習を進めるうえで有効であったと考える。

② 自己評価による意識化

学習カードの中央に、自分の似顔絵と自分の「よいところ」を書かせ、それを毎時間記入させることで、常に自分を意識しながら学習に取り組みせるようにした。

「よさ」の自己評価の欄には、自分の「よいところ」が、今日の授業の中でどのように生かされたかを記入させた。

単元の最初のころは、自分の「よいところ」と自己評価の欄がうまくつながらず、どう自己評価するのか理解できない児童が多かった。そこで、「今日の授業で、あなたのよいところが表れましたか」といった、教師の具体的な助言により、書けるようになった。

基礎的・基本的な内容の定着に関しては、毎時間めあてを記入させ、特に1・2時間目では、できた技を色鉛筆で塗りつぶしたり、自分の似顔絵のところまで線で結び、技ができたという意識を持たせた。

T子は、学習カードに自分のよいところを「いっしょうけんめいやることです」と書いており、自己評価の欄では「あきらめないで、いっしょうけんめいやった」と書いた。

このように、時間を追うごとに、児童一人一人が自分の「よいところ」を意識して学習できるようになった。



③ 相互評価による意識化

ア 学習カードの活用

毎時間のまとめの段階に、グループ内で学習カードを交換しお互いに読み合うことによって、自分の技や態度についての友達の評価を知ることができた。友達が書いてくれた感想を、学習カードに改めて記入することは、自分の「よいところ」を意識化する大きな手だてとなった。